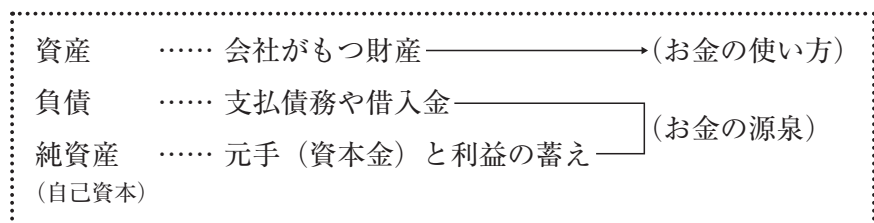


10 貸借対照表の構造

◆ 貸借対照表とは

貸借対照表は、企業の一時点における財政状態を示しています。わかりやすくいえば、期末時点でどういう財産をもっているのか——お金をどのように集めてきて、そのお金を何に使ったのか、そうした財務状況を表したものです。

貸借対照表には3つの要素があります。資産・負債・純資産です。



調達してきたお金 (負債・純資産) を使って、どのような資産をもっているかを表現したものが、貸借対照表です。したがって、構造としては「資産 = 負債 + 純資産」となります。つまり、資産の合計額と、負債と純資産の合計額が一致するというのが基本構造となっています。この「一致する」という言葉を英語で表すと「バランスする」。したがって、貸借対照表は「バランスシート (Balance Sheet : B/S)」と表現されています。

「資産 = 負債 + 純資産」の関係性を図にすると、以下のようになります。

(借方)	(貸方)
資産	負債
	純資産 (自己資本)

貸借対照表は、会社の一時点における財政状態 (ストック) を示しています。いわばスナップショットで撮った状態です。

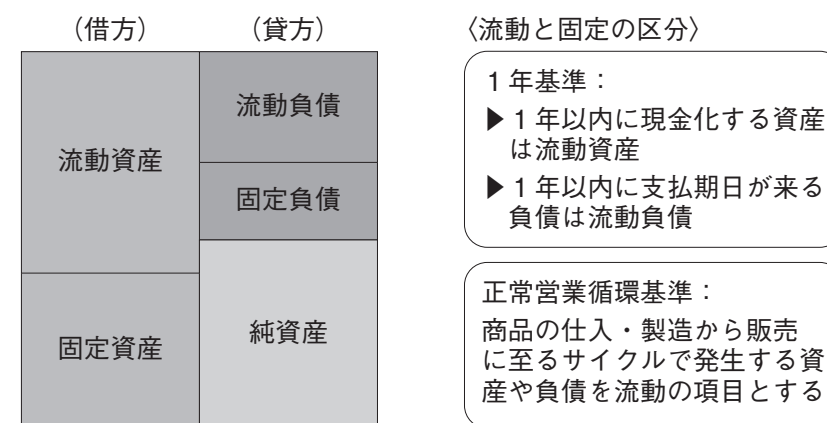
企業は、純資産と負債で調達してきたお金を使って、それを資産に換えて事業活動を展開し、利益を生み出していくものです。貸借対照表は、この企業の事業活動をよく表現したものだといえます。

◆ 貸借対照表の構造

貸借対照表の構造をさらに細かく見ていきましょう。資産は、流動資産と固定資産に分けることができます。また負債も、流動負債と固定負債に分けることができます。

流動と固定を分ける基準は、いずれも1年となっています。1年以内に現金化する資産は流動資産、1年を超えて現金化する、もしくはそもそも現金化を想定していない資産は固定資産になります。また1年以内に支払う負債は流動負債、1年を超えたあとに支払う負債は固定負債になります。

およそ1年基準で理解していただいてもよいのですが、それとは別の基準として「正常営業循環基準」というものがあります。これは、商品の仕入 (製造業であれば製造) から販売に至るサイクルで発生した資産や負債を流動の項目に入れるという考え方です。



では、具体的な数字が入った貸借対照表で理解を深めていきましょう。

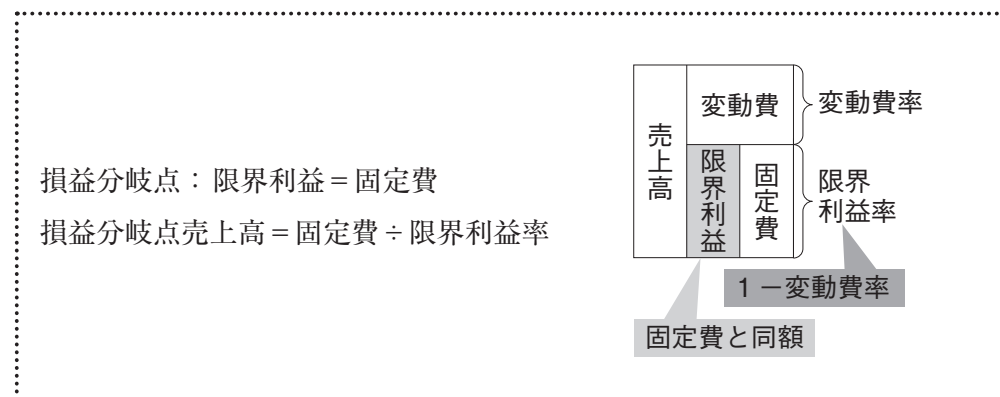
まず、資産合計と負債・純資産合計が10億円で一致している、つまりバランスしていることを確認しておいてください。

20 損益分岐点の求め方

◆ 損益分岐点売上高では「限界利益＝固定費」

損益分岐点売上高を求める公式は、「損益分岐点売上高＝固定費÷限界利益率」です。ですが、ただ公式を暗記するというだけでは応用が利きません。なぜこのような形で損益分岐点売上高が求められるのか、そこを理解しておくことで、公式を暗記することなく損益分岐点売上高をすぐに計算できるようにしていきたいと思います。

損益分岐点売上高のときには、損益がゼロになります。また、損益分岐点においては、「限界利益＝固定費」になります。これを図にすると、以下のような関係性にあることがわかります。



このように考えると、「損益分岐点売上高＝固定費÷限界利益率」という公式は、実は固定費と同額である限界利益（額）を限界利益率で割ることで、そのときの売上高を算出することができるということがわかります。

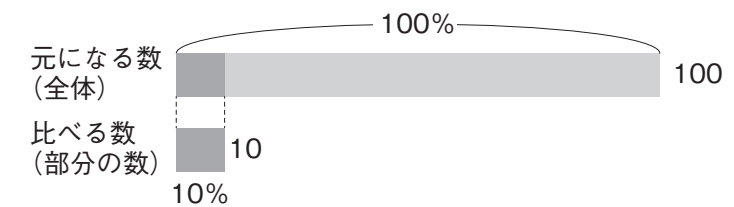
◆ 算数の復習／割合の計算

今の説明でわかりづらかったという人のために、もう少し詳しく説明しておきましょう。

100個のお手玉があります。そのうち、10個は赤色で残りは青色です。赤色のお手玉の割合（％）を求めてください。

これは、まさに小学校の算数の問題ですね。100個のお手玉があつて10個が赤色。すると、その割合は「10÷100＝10％」と計算できます。

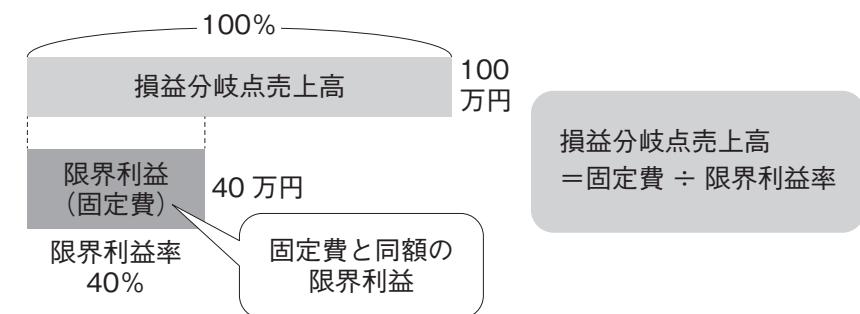
実は、小学校の算数では次のように習っています。



- ① 10 ÷ 100 = 10%
- ② 100 × 10% = 10
- ③ 10 ÷ 10% = 100

- ① 割合 = 比べる数 ÷ 元になる数
- ② 比べる数 = 元になる数 × 割合
- ③ 元になる数 = 比べる数 ÷ 割合

全体の数100があつて、部分の数10がある。部分の数10の割合が10%だとすると、部分の数10をその割合10%で割ると、元になる全体の数100が算出されるという計算です。実はこういう計算を先ほどはしていたわけです。



損益分岐点売上高（全体）を求めるときに、限界利益（部分）が40万円で、限界利益率（部分の割合）が40%とすると、「損益分岐点売上高＝40万円÷40%＝100万円」と計算されることになります。

先ほどの計算は、このような構造になっていたわけです。「限界利益＝固定費」ですから、「固定費（限界利益）÷限界利益率」を計算することで、全体の損益分岐点売上高が算出できるということなのです。この関係性をしっかりと理解していただきたいと思います。

29 財務分析演習

◆ 実際の財務諸表を視る

《演習問題》

A社・B社の財務分析を行ない、比較してみてください。

[単位:百万円]

	A社	B社
売上高	8,604,207	1,300,843
売上原価	5,468,774	276,739
売上総利益	3,135,433	1,024,104
販管費	2,919,902	780,112
営業利益	215,530	243,991
流動資産	6,713,352	867,514
固定資産	3,094,320	1,450,646
流動負債	6,559,221	798,708
固定負債	2,614,186	230,284
純資産	1,849,278	1,289,168
総資本	11,022,685	2,318,160

A社・B社は、ともにかなり大きな会社です。

A社については、売上高が8兆6,042億円、営業利益が2,155億円、総資本が11兆227億円という非常に大きな会社です。

B社は1兆3,008億円の売上高、営業利益が2,440億円、総資本が2兆3,182億円です。両社ともに大企業ですが、こうした数字だけでは経営の状況がわかりづらいですね。これまでやってきたように分析してみたいと思います。

まずA社の分析を行ないます。損益計算書の項目については、売上高利益率、そして貸借対照表の項目については総資本に対する割合を入れました。さらに重要な経営指標、数字を計算します。

A社 財務分析 [単位:百万円]

	A社	
売上高	8,604,207	100.0%
売上原価	5,468,774	63.6%
売上総利益	3,135,433	36.4%
販管費	2,919,902	33.9%
営業利益	215,530	2.5%
流動資産	6,713,352	60.9%
固定資産	3,094,320	28.1%
流動負債	6,559,221	59.5%
固定負債	2,614,186	23.7%
純資産	1,849,278	16.8%
総資本	11,022,685	100.0%

(参考) 固定長期適合率: 69.3%

売上高総利益率	36.4%
売上高営業利益率	2.5%
売上高販管費率	33.9%
流動比率	102%
固定比率	167%
自己資本比率	16.8%
総資本営業利益率 (ROA)	2.0%
総資本回転率	0.8

「流動比率 = 流動資産 ÷ 流動負債」「固定比率 = 固定資産 ÷ 純資産」「総資本営業利益率 (ROA) = 営業利益 ÷ 総資本」「総資本回転率 = 売上高 ÷ 総資本」で、それぞれ計算できます。

これらの数字を視ると、「売上高営業利益率 = 2.5%」ということで、利益率としてはやや低い数字だということがわかります。ですが、売上高が8兆6,042億円という、とてつもない額を上げている会社なので、売上高営業利益率は相対的に低くても、営業利益の絶対額は2,155億円という、巨大な利益を出しています。

また、「固定比率 = 167%」ということですので、一般的に考えるとやや高いなという印象があります。そこで、実際の額を視ると、3兆943億円という大きな固定資産を抱えていることがわかります。一方で、「流動資産 = 6兆7,134億円」「流動負債 = 6兆5,592億円」と、流動資産・流動負債ともかなり大きい数字が入っています。

この会社の業界について、想像がつくでしょうか。この会社は、流通業の会社です。流通業の会社というのは、営業利益率は相対的に低めに出ます。この会社は実は、ショッピングモールを運営して全国的に展開している流通大手のイオン株式会社です。

流通業は、リアルの店舗形態でやっているところは軒並み苦戦をしています